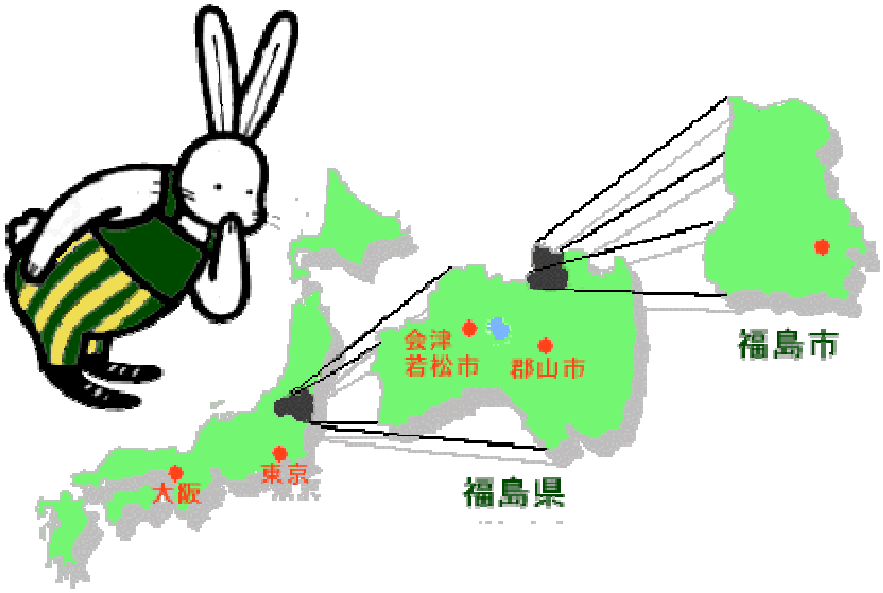
事例番号 27　まちに新しい風を（福島県福島市）

1. 背景

福島市は福島県北部に位置する人口約 28 万 9 千人の県庁所在地である。東西の山地に挟まれた福島盆地に市の中心市街地が形成されている。12 世紀末に伊達一族が支配する土地となり、16 世紀末には豊臣秀吉により蒲生氏郷が封じられ、数年後の領地替えで上杉景勝の領地となった。江戸時代には一時幕府領となったが、18 世紀初に板倉重寛の所領となり、以後幕末まで板倉家の支配するところとなった。福島の城下町は蚕種、生糸、織物の集散地として商業が栄えた。明治以降は県境所在地として県の政治、文化の中心地となった（1907 年の市制施行により福島市になるまでは福島町）。

近年の福島市ではモータリゼーションの進展とともに郊外化が急速に進展した。公共施設も郊外に移転した。さらに最近では大規模商業施設が郊外に次々に立地したことから中心市街地が急速に空洞化した。それに危機感を抱いた市は、地元の資産、資源を有効に活用することにより交流人口を増やし、それを梃子にまちの活性化を図る戦略に取り組み始めた。その活動は市から市民団体へ、市民団体から市民へとネットワークを広げながら広範に展開されつつある。



福島市の位置　（資料：福島市ホームページ）

2. 目標

福島市中心市街地活性化基本計画では、「新しい風」をおこすことを基本的な視点としている。その「新しい風」とは、「郊外から田園風景等の自然環境の良さを見直すことや、農産物等の受入れ及び活用、高齢者の都心居住への呼び戻し、交流人口の呼び込み等、郊外部の情報や蓄積を受信し、それを受けて、今度はまちなかから発信していく風」である。「福島の蓄積を生かしたコンパクトなまちづくりを進め、住む人、働く人、旅する人、遊ぶ人が賑やかに交流し合う、健康で安全なふるさと都心づくり」を目指し、次の 8 つのまちづくりの方針を掲げている。

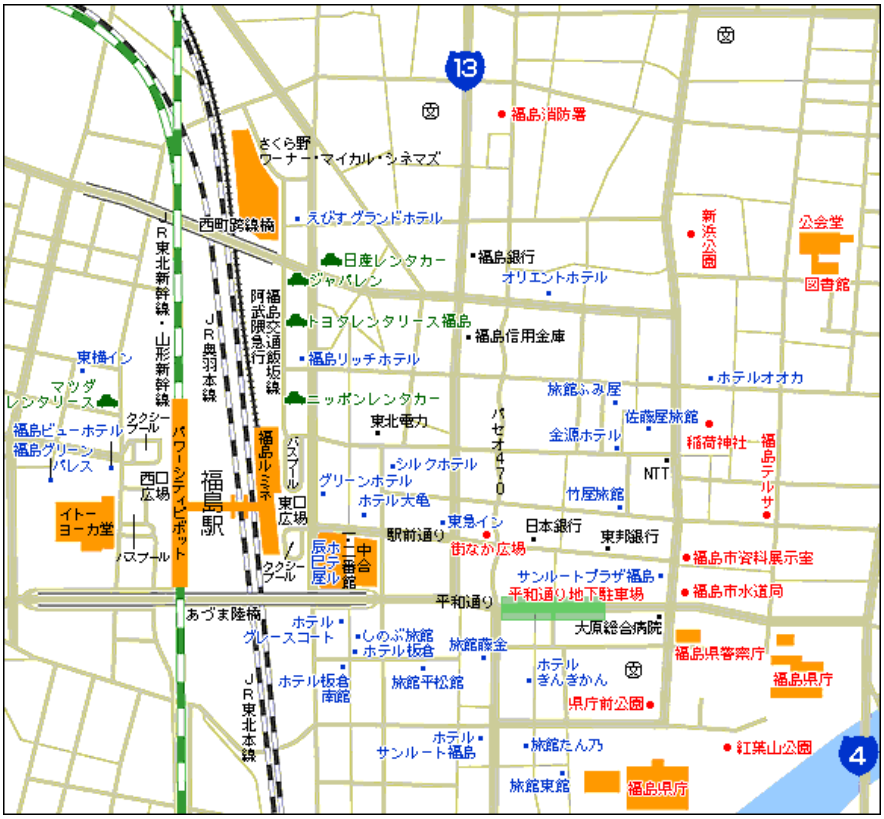
① 環境にやさしい ② 老いも若きも参加して ③ 歴史を学び創り ④ 新しい価値を育む
⑤ にぎやかで楽しい交流 ⑥ 成長し続ける ⑦ 人が住み行きかう ⑧ おらがまち福島

これらを英語で記述すると、Kind To Environment / Old & Young Participating togather / Restoring the History & Education / Adding New Value / New Exciting & Funny Exchange / Sustainable development / Human Life Centered / Oh! What a wonderful City Fukushima is! ということになり、これらの頭文字をつなげると KORANSHO になる。それで福島のまちづくりのキャッチフレーズは「新しい風ふくしまさ、こらんしょ」(いらしゃいませ)であり、具体的には、外からの観光客の街なか観光の促進や新しい教育方法を梃子とした商店街活性化等を図っている。

3. 取り組みの体制

市がきっかけをつくり、市民団体、市民等の幅広い活動を誘発している。

福島市広域地図 (資料:福島観光協会ホームページ)



福島市中心部（上）と中心市街地（下）（資料：福島観光協会ホームページ）

4. 具体策

(1) 地元資源を活かす

① 花見山公園から街なか観光へ

福島市では、以前から花見山公園(花木生産農家の個人所有の公園)が大勢の観光客を集めていた(故秋山庄太郎氏訪問を契機に)。それに着目した市は、2003 年に「花の写真館」(福島市写真美術館)をオープンさせた。それにより花見山公園の来訪者は増加するようになった。

一方、市は 2001 年に歴史的建築物である旧日本銀行福島支店長役宅を取得して「中心市街地活性化広場公園整備事業」を用いて整備し、まちづくりの交流拠点としていた。それを契機に周辺住民により「御倉町かいわいまちづくり協議会」が組織され、定期的な会合やイベントが行われるようになっていた。また、市内には「古関裕而記念館」等の歴史的建造物があった。それらに注目した市は、それらの既存施設を組み合わせることで街なかの魅力を高め、花見山公園の来訪者を街なかに回遊させる「街なか観光」の促進を図ることとした。そしてその組み合わせの効果が発揮され、花見山公園の来訪者が市内を散策するようになった。また、見どころが増えたことにより、花見山公園の来訪者も増加するという相乗効果が見られるようになった。

ところが、観光客の増加とともに交通渋滞、違法駐車がひどくなった。その対策として、市民や市民団体等により「花見山周辺維持管理委員会」が結成され、市の補助金の下、ボランティアによる交通整理が行われるようになった。交通渋滞、駐車違反もまちづくりを活性化させる材料となった。2004 年には上記委員会と福島市が事務局を担当する福島観光協会、福島市物産振興協会により「花見山環境整備協議会」が組織され、マイカーの乗り入れ規制に伴う警備員の配置、シャトルバスの運行等行った。その費用は「環境整備協力金」(駐車場を利用する大型バスなどに負担してもらった)でまかなった。

2003 年度には「ふくしま花案内人講座」を開講し、「ふくしま花案内人」の養成を開始した。その後、「ふくしま花案内人の会」も結成され、自主的な研修も行われている。

花見山公園 (資料:福島観光協会ホームページ)

② 街なか観光から全市観光へ

福島市の農業にはさまざまなものがあるが、特にナシの生産高は市町村別で全国第一位、モモの生産高は全国第二位である(モモも第一位であったが、2004 年度に山梨市が合併したことで第二位になった)。その福島市では桜の開花時期である 4 月中旬～5 月はモモ等の開花期でもあり、

とても美しい景色が現出される。このような市の特性を活かすことで交流人口を増やし、それを地域の活性化に結び付けようとする活動が各地区でさまざまに取り組まれはじめた。

飯坂地区では、果物と温泉とを結びつけて観光客を呼び込む取り組みである「飯坂温泉くだものの木オーナー制度」が実施されている。松川地区では、グリーンツーリズム事業である「ド田舎・水源郷（どいなか・みずはらむら）」が実施されている（田植え体験、そば打ち等）。一方、市としては温泉地依存の観光戦略を見直し、家族や小グループ対象の観光施策を展開した。

福島市では、これらのさまざまな取り組みを統一テーマでアピールするため、「花も“み”もある福島市」のキャッチフレーズを掲げた。そして、福島駅周辺の街なかで「食と文化のわいわいフェスティバル」を開催したり、福島青年会議所が「開花来馬宣言」（桜の開花と福島競馬場の春の競馬の開催）を毎年宣言したりしてアピールしている。そのほか、周辺市町村との連携の下、「阿武隈フリーウォーキング」「ふくしま花ウォーク」等が実施されている。

なお、イベントに関しては、これまで主催者や会場の別に行われていた PR を一元化して WEB 上で提供するイベント情報システム「まちなかイベントカレンダー」を「新しい風ふくしま懇談会」（行政と民間の連携組織）が開発した。掲載する情報は各イベント会場や関係団体が直接入力する仕組みになっているため、常に最新かつ詳細なイベント情報が提供されている。「まちの駅　ふくしま情報ステーション」のホームページ（http://www.machi-fukushima.jp/event/）を通じて情報提供されている。

(2) 空き店舗対策の実施

市は、空き店舗対策として、2002 年度～2004 年度に「商店街空き店舗対策事業」を実施するとともに、テナントミックスを推進する事業者に対して家賃を補助する「大型空き店舗対策事業」を実施した。2003 年に福島駅西口にオープンした「コラッセふくしま」に商工団体が移転したが、その商工会館跡のビルの 1 階部分を市が借りてチャレンジショップを募集、新規創業者育成を図っている。

(3) 福島まちづくりセンターの活動

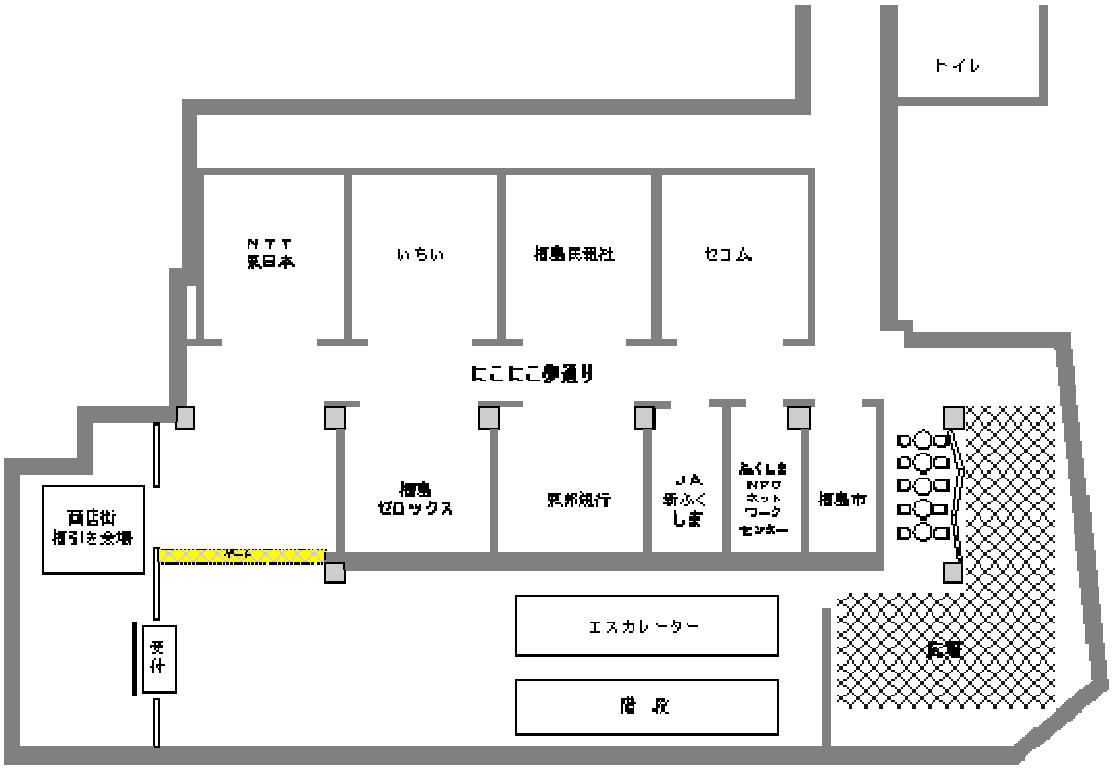
TMO として設立した福島まちづくりセンターもまちの活性化に寄与している。福島市は 1991 年に「福島市 24 時間都市構想」策定し、さらに 1998 年に中心市街地活性化基本計画「新しい風ふくしま計画」策定した。そして TMO 機関として第三セクター「㈱福島まちづくりセンター」を指定した。TMO 構想では福島駅周辺 130ha のエリアを都市回遊軸に設定し、核施設の整備等を実施した。

福島まちづくりセンターは、共通駐車サービス券事業、買い物ポイントカード事業、FAX 宅配事業、街なか広場等でのイベント等を実施している。また、借上市営住宅の低層階でテナントミックス事業も実施している（農家直送の生鮮食料品店が入っている）。

(4) 「スチューデント・シティ」の実施

中心市街地のデパートが撤退した跡の大型店舗のワンフロアを県・市が借上げ、商店、銀行等が並ぶ架空の街「スチューデント・シティ」を整備し、小学生向けの経済等の体験学習の場にするとともに、地元の出店を促すことによって、中心市街地の活性化を図った。事業実施は 2003 年度から 2005 年度の 3 年間で、県、県教育庁、市、市教育委員会、福島商工会議所、NPO 等で組織する実行委員会が行った。

スチューデント・シティ入り口　（資料：福島県ホームページ）



スチューデント・シティ平面図　（資料：福島県ホームページ）

スチューデント・シティの活動の様子　（資料：福島県ホームページ）

5. 特徴的手法

統一テーマの下、市内のさまざまな地元資源を有機的に結びつけ、情報を一元化するシステムを構築しつつ効果的にアピールしていることが特徴である。また、教育という地域社会の将来の発展を担う事業を地元企業等の協力の下で行う体制をつくり、地域社会の連帯感を強めていることも特徴である。福島市では、総じて地域資源の有効活用とその経済効果の地域内への波及、域内循環の高進がうまく図られている。

6. 課題

福島市の統一イメージをより強固に、より広く伝達していくことが課題であろう。

（参考・引用文献）

伊藤滋編著『都市再生最前線』ぎょうせい、2005 年
中出文平＋地方都市研究会編著『中心市街地再生と持続可能なまちづくり』学芸出版社、2003 年
佐藤滋＋城下町都市研究体編著『図説　城下町都市』鹿島出版会、2002 年